

## 巨人との約束

中一・若宮 遙希

「はい、143センチね」

中学入学後初めての身体測定。僕は背が小さい。前から二番目。小さいせいだからかわれる。特技もないし、仲の良い友達もまだいない。ぼんやりと過ごしていると1学期が終わってしまった。明日から夏休みで、今日は夜宮。夜宮の屋台で使っているいいよと、夜ご飯代も含めて母さんから千円もらってきた。

たくさんの屋台がある中、神社の奥にひっそりと何を売っているのかわからない、一軒の店があった。どの店も行列なのに、誰もいない。近づいてみると、そこにいたのは白髪を長い三つ編みにしたおばあさん。いかにも不気味。ミミズのような字で

『あなたの願いを一つ叶えます』

という白というより茶色がかったシワシワの紙が貼ってあり、たくさんの小瓶が並んでいる。

『魔法の小瓶一つ千円』

うさん臭そうに少し離れて見ていると、

「坊や、私が見えるのかい？」

という。誰に向かって言っているのかと周りをキョロキョロ見ても、周りに僕一人。

「お前さんのことだよ。見えている人にしか買えない店だよ。千円で一つだけ願いが叶う。安いもんだろ」

僕は心の中で（高いよ。そして絶対に詐欺だ）とつぶやいた。そ

---

して通り過ぎ、明るい他の店先に向かった。すると、クラスの会いたくない奴らに声をかけられた。

「お前、一人で来てんのか？ 一緒に回ってやってもいいぞ。一人だとチビだから迷子になるぞ」

とニヤニヤしている。恥ずかしさと怒りと悔しさと真赤になりながら、その場から走って逃げた。気が付くと、またあの店の前に来ていた。

もうこれ以上、いろんな店を回って誰かと会いたくないという思いと、お金を使わずに帰ったら母さんが心配するかもという思いでやけくそで買ってしまった。

「ありがとさん。瓶の裏に書いてあること、必ず守るんだよ。守らなければ願いは叶わない、どころか大変なことになるよ。」

家に帰る道中で、ポケットに入れた小瓶をもうれつに後悔し始めた。お腹も減っている。(なんてムダ使いをしてしまったんだ！)

家に帰り、僕は母さんの呼びかけに適当に返事をし、自分の部屋にこもった。魔法の小瓶を手取る。裏を見ると、

『願い事を口に出して言いなさい。そして毎日一メモリずつ飲んでください』

とだけ書かれている。半信半疑で小さな声でつぶやく。

「僕は大きくなりたいんだ！ そして、誰からもかわれないようにになりたい」

気が付くと眠っていた。ふと目覚めるといつもベッドから見える月明かりが全く見えず、真っ暗闇だった。何時だろう。時計を見ると丁度、夜中の十二時だった。すると、何かの気配を感じた。窓からそっと見てみると、それは大きな目だった。

---

「ひゃっ！！」

大きな悲鳴を上げるところだった。自分の口を手でふさぎ、何とかこらえた。こっちを見ている。でも、不思議と恐怖はなかった。よくみると巨人のようだ。

そして、巨人は窓ごしに言った。

「驚かせてごめん。君はその小瓶を手に入れてしまったんだね。これから私の言うことをよく聞くんだけ。でなければ、私みたいになっってしまうよ。私みたいな巨人にね。大きくなりすぎて、怖がられるからみんなが寝静まった夜中にしか外にでられない。夜中だから誰とも遊ぶこともできない。寝ている子供をただ見つめる毎日さ。君がちょうどその小瓶を持っていたから声をかけたんだ」

優しい声だった。巨人はこう言った。

「毎日この約束を必ず守って。夜の十時までに眠ること。外で体を動かすこと、ご飯は残さず食べること、そして寝る前にこの小瓶の液体を一メモリだけ飲むこと。守らないとこうなるからね」

寂しそうに笑って、消えた。そして、月明かりが戻り、僕はまた眠ってしまった。

朝、目が覚めると小瓶がまくら元に転がっていた。(昨日のあれは夢だったのかな。でも、もし本当だったら大変なことになる：)

今日から夏休み。母さんは家でダラダラすると言うし、クラスの大半が部活で学校だ。外で体を動かすなんて、一人じゃ毎日無理だ。しょうが無い、あれしかないか。

僕は学校に行き、野球部に入った。担任の先生が野球部の顧問だから、野球のルールはテレビでいつも父さんが見てるからだいたい覚えている、そんな理由。初日から、校庭を走ったり、球拾いをし

たり、まだグローブが無くてもやることはたくさんあった。部活でお腹がすいたので、ご飯はいつもよりおいしい。夜もクタクタで9時には寝てしまった。寝る直前に何とか思い出して小瓶の一メモリも飲んだ。

そうして毎日部活に行っているうちに、同じ一年生ともキャッチボールをしたりと仲良くなった。部活に行くとお腹が減るから、ご飯は前よりたくさん食べるようになった。疲れているので、毎日早く寝てしまう。でも、忘れずに小瓶を一メモリずつ飲み続けた。

あつという間に一カ月の夏休みは終わった。その頃ちょうど小瓶の中身は空っぽになった。気がつくと僕は一カ月の夏休みの間に身長が三センチ伸びていた。

そして、一年が経った中学二年の夏休み。僕の身長は155センチになっていた。まだ大きいとは言えない。平均身長よりも小さい。でも、少しずつ自分に自信がついてきたせいからか、からかってくるあいつらには逃げずに言い返せるようになった。それが何度か続いているうちに、それもなくなった。小さいせいだからかわれているんじゃない、何も言い返さないからだとかやつと気づいた。

### 『特技は野球』

とまではまだ言えないが、レギュラーを目指して部活は毎日頑張っている。今年の夜宮は友達と行った。あの怪しげな店にも行ってみたが無かった。というか、今の僕には見えなかったのかもしれない。

本当にあれは魔法の小瓶だったのか。真夜中に見た巨人は夢だったのか。いまだにわからない。でも小瓶の中身がなくなった今も、自然とあの約束が守られている。僕は大きくなるまで巨人との約束とあの寂しそうな目をきつと忘れないだろう。